



春日町まちづくり協議会の会長を務める寺田さん。世界遺産の登録後は交流人口が増えたと嬉しそうに語ってくれた。

家もかくれキリシタンの信仰を継承していたという。「信仰をしていたのは、私の祖父の時代までです。昭和初期くらいでしょうか。家にかくれキリシタンのご神体である『納戸神』があったことは覚えていますが、私自身は信仰していませんので、世界遺産への登録が決まった時は本当に驚きました」。

寺田さんは安満岳についても教えてくれた。「小さい頃から手を合わせていました。正月には山頂まで登って、お参りしたものです。集落の人たちにとって安満岳は大切な存在ですね」。

山から海へと連なる棚田の風景は、息を呑むほどに素晴らしい。春日の棚田が安満岳から流れ出る水を利用して拓かれたと聞けば、聖なる山に手を合わせる気持ちが分かるような気がした。

現在では、かくれキリシタンの組織は解散しており、信仰は途絶えているものの、十六世紀の布教当時の景観を色濃く残すこの「平戸の聖地と集落」は、二〇一八年、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として登録された。

世界遺産への登録をきっかけに、集落には案内所「かたりな」がオープンした。集落に伝わるかくれキリシタンの信仰具などが展示されている部屋では、ガイドを務める寺田賢一郎さんが春日の歴史を丁寧に説明してくれた。聞けば、寺田さんご実

長崎地方におけるキリスト教布教の最初の地である平戸島。この島には、キリスト教が禁止になった後も密かにキリシタンの信仰を継承し、禁教が解かれた後も「かくれキリシタン」としてそれまでの信仰を守り続けた人々が暮らす地域がある。春日集落もその一つだ。キリスト教が伝わる以前から、集落の人たちが手を合わせる安満岳は神仏習合の霊場であり、異なる宗教が共生する春日集落は、信仰が重なり合う稀有な土地である。

もう一度、行きたい

平戸

春日集落



集落の中央に位置する丸尾山。頂上には祠があり、集落の人たちによって大切に守られている。





日本の原風景が
心に広がる
春日の昔ばなし



もう一度、行きたい

平戸 春日集落

「か たりな」には、地元の人たちが交替でおもてなしをしてくれる交流部屋がある。この日の当番を務めていたのは、春日集落で生まれ育った山口みつ子さん。

みつさんは十九歳で同じ集落の男性と結婚し、四人の子どもを育てたという。「四人目を産んですぐ、二十九歳で海女になりました。漁が解禁になると海へ潜り、アワビやサザエ、ナマコやウニなどを獲りました。禁漁の時期には、カサゴの延縄漁もやりましたね。海女歴は三十三年です」。みつさんは見たこともないような大きなアワビの殻を手に、「これよりも大きいものをたくさん獲っていたんですよ」と笑顔を見せた。

集落が世界遺産になったことについて、みつさんは寺田さん同様に、とても驚いたと話す。「小さい頃から家に祀っている水神様を拝んだり、息子が漁に出る時には安満岳様に航海の安

全と大漁を祈ったりしていましたが、かくれキリシタンのことはよく知りませんでした。まだ世界遺産に登録される前でしたが、かくれキリシタンの家に嫁いでいた妹が『今日はキリシタン講がある』と話しているのを聞いて初めて、戸主が集まって何かしらの行事をやるのだと知ったくらいです」。そんなみつ子さんだが、自宅には八つの神様を祀っているという。仏様、水神様、大神宮様、火の神様といわれるオコジン（荒神）様…。そしてもちろん、安満岳にも手を合わせる。春日集落には風景だけでなく、昔ながらの心のよりどころが継承されているのだろう。

現在、みつさんは夫と息子夫婦、そして孫の三世代で暮らしている。「カラスの声しか聞こえないような静かな所ですが、自然が豊かで暮らしには不自由しません。集落の人たちは皆、仲良しで兄弟のようなものです。また、かたりなに来れば、たくさんの方たちと友達になれるのが嬉しいですね」。地元の人たちが語ってくれる思い出話や人生の話は、最高のお土産。風に揺れる稲穂が一層輝いて見えた。

展示されているかくれキリシタンの道具（オテンベンシヤ）。家のお祓いや病気治しの呪具として用いた。



アワビやサザエの殻には、みつさんの思い出が詰まっている。



春日の水でいれたお茶とともに、運がよければ、手作りの漬物などでおもてなししてもらえる。



かたりなでは、春日集落ならではの、お土産や御朱印も並ぶ。